僕の昭和史 III

安岡章太郎

Seven Stars
charcoal filter
Mild Cigarettes

僕の昭和史Ⅲ

安岡章太郎

Seven Stars

charcoal filter

Wild Cyprinids

僕の昭和史Ⅲ

安岡章太郎

Seven Stars

charcoal filter

Wild Cyprinids

僕の昭和史Ⅲ

安岡章太郎

Seven Stars

charcoal filter

Wild Cyprinids

講談社

僕の昭和史③
定価——一四〇〇円
昭和六三年九月二〇日第一刷発行
著者——安岡章太郎
© Shotaro Yasuoka 1988 Printed in Japan
発行者——加藤勝久
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二-二-二　郵便番号一二二-〇一　電話〇三-九四五-一一一一
印刷所——㈱精興社　製本所——㈱藤沢製本
ISBN4-06-201203-0 (0)
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは、学芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

僕の昭和史③

「セブンスター」は一九六〇年代最後の年、昭和四十四年に発売された。原色をまったく使わないデザインは、新鮮な印象を人々に与えた。

装幀＝田村義也

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

現代は情報過剰の時代であり、いまどき何処へ行ったって、目新しいものや驚くようなものは何もないという。それはそうかもしれない。昭和三十五年十一月二十七日の早朝、ニューヨーク空港に着いて、僕はタクシーをひろい、ホテルに向った。イースト・リヴァーを渡り、車が高速道路から見通しのきくカーヴにさしかかると、黒人の運転手は速度を落しながら、われわれを振りかえって、

「ジス・イズ・ニューヨーク・シティー」

と言った。なるほど、フロント・ガラスの向う側に、朝靄につつまれたマンハッタンの超高層ビル群が鼠色のシルエットを浮び上らせており、まるでシネマ・スコープの画面を見るようだ。しかし、その風景に、僕は何の感動もおぼえなかった。これまでに、映画や写真や絵ハガキなど

で、何十ぺん、何百ぺん、見てきたかわからないニューヨークの摩天楼、その実物がいま眼の前にあらわれたのだから、それなりに心を動かされるものがあっていいはずだが、僕にはそれがまったく無い。この数十階、いや百階以上もある建物は、それぞれが人間の野望と競争心と利益追求の執念から生れた近代社会の記念碑なんだ、と僕は自分自身に言いきかせようとするのだが、そんなことは眼の前にある都市の風景とは何の関係もなさそうだった。

「だいぶ走ったわね、これだと十ドルぐらいとられるかしら」と、となりで女房がハンドバッグの中身を掻きまわしながら言う。「チップが要るんでしょう、二割ぐらいかしら」

僕は現実に引き戻され、感動することはアキラめて、こたえた。

「いや、二割はいらない。一割五分でいいだろう。しかし、荷物の代もとられるぞ、鞄一箇について一ドルぐらいかな……」

実際、ビルというのは機能がムキ出しになって立っているだけだから、大きくても小さくても、背が高くても低くても、その機能が同じことなら、どんなに巨大なビルが並んでいたって、それだけで感動させられる理由はないのかもしれない。しかしじつのところ僕は、無感動であったというより、初めて外国の土地を踏んだことで、緊張のあまり周囲を見廻して、感動している余裕もなかったと言うべきかとも思う。そのことは、目的地のテネシー州ナッシュヴィルに着いてみて、痛感せざるを得なかった。

いまは、アメリカ西部海岸の大きな街では日本字の道路標識まで出ているところもあり、東部でもニューヨークの通りを歩いていると、ふと有楽町から西銀座へかけての道路を歩いているような錯覚を起しそうになったりもする。しかし、こんなことはアメリカ全体からすれば、極く限られた地域の特殊な事情にすぎない。まして、いまから四半世紀前一九六〇年の地方都市では情況はまるで違っていた。

「ナッシュヴィルには、たしか日本人は一人もいないはずです」

とは、日本でS女史から言われてきたことだ。だいたい留学地を選ぶとき、なるべく日本人のいないところ、というのがS女史の上げた第一条件であった。そして僕自身、それは望ましいことであるような気がしていたのだ。ただ僕は、そんなところへ自分が行くとどういうことになるのか、なぜか考えてもみなかった。それは考えたって仕方のないことではあるけれども。

ナッシュヴィルに着いて、僕たちがホテルのロビーに入って行くと、居合せた客がいっせいにこちらを見た。それはいいとしても、僕がフロントで部屋をとり鍵を受けとって、何気なく振りかえると、うしろのソファーに坐っていた客たちが、全員、さっと新聞をひろげて読みはじめたのは、まことに奇妙な心持であった。おそらく彼等は、たったいままで僕と女房の後姿を穴のあくほど見つめていたに違いないのである。それ以来、僕は町を歩いていても、図書館で本を眺め

ていても、また便所で小用を足していても、いつも背中にムズ痒いような視線を感じるようになった。こういうことは、何もナッシュヴィルに限ったことではなく、何処にでもあることだし、日本に来ている外国人は年中これに似た経験をしているかもしれない。但し、日本では便所の扉のまえに、"WHITE" とか "COLOURED" とかは書いてない。

いや、便所に限らず、ホテルも、レストランも、バスの待合所の椅子も、アメリカ南部では白人用と黒人用に分かれており、日本人は白人用を使用すべきだということを、あらかじめ僕は知らされてはいた。けれども、こういうことは、ニューヨークの摩天楼などとちがって、いくら予備知識があっても、実際にぶっつかってみるまで、そのショックはわからないのである。これは、日本人が白人用に入れられるか黒人用に振り向けられるか、といった事柄ではない。ふだんわれわれが忘れている〝人種〟という問題を真正面から突きつけられるために、まったくナマナマしい衝撃を覚えさせられるのだ。

しかも、人種偏見は必ずしも黒人にだけ向けられるのではない。カラード・ピープルは一般に黒人を指すのであるが、有色人種ということを厳密に言う場合、われわれ黄色人種も勿論〝有色〟のなかに含まれる。ふだんそんなことを表立って言われることはないが、たとえばアパートを借りるようなときには、そういうものにぶっつかる。住宅街には「貸部屋あり」の看板を出した家がいくらもあるが、僕はそういうところに飛びこんで、三軒ばかり立て続けに断られた。

「たったいま、借り手がついたところなので」、といったことを判で押したように言われる。それで僕は“For Rent”という言葉には何か自分の知らない他の意味があるのか、と思うようになったぐらいだ。何軒目かに、頤の角ばった気の強そうな婆さんが応対に出てきて、眼鏡ごしに僕の顔を見据えながらハッキリと言った。

「あたしのところは、日本人には貸したくないのよ。だって日本人は、部屋を汚くするって言うからね。……」

それをきいて、僕はかえってホッとした。断られるにしろ、率直に理由を明らかにされれば納得しやすいからだ。傍で女房は、「日本人は部屋をよごすだなんて、ひとをバカにして。何よ、こんな古ぼけたボロ家……」と、しきりに憤慨していたが、結局僕らはこの家の二階の部屋を「決して汚すことはしない」という約束で借り、そこで半年間暮らすことになった。

とくに日本人の立場よりして主張すべきは、黄、白人の差別的待遇の撤廃なり。かの合衆国をはじめ、英植民地たる濠州、加奈陀等が白人に対して門戸を開放しながら、日本人はじめ一般黄人を劣等視して、これを排斥しつつあるは、いまさら事新しく喋々するまでもなく、我が国民の夙に憤慨しつつあるところなり。黄人と見れば、すべての職業に就くを、妨害し、家屋耕地の貸しつけをなさざるのみならず、甚しきはホテルにて一夜の宿を求むるに

も白人の保証人を要する所ありというにいたりては、人道上、由々しき問題にして……

これは前にも引用した近衛文麿が、大正七年（一九一八）、ヴェルサイユ講和会議に出席するに当って述べた文章である。今世紀の初め頃から、アメリカ西部海岸では排日運動がさかんになっており、近衛は第一次大戦講和会議の機会をとらえて、それに反対しようとしていたわけだが、いざ会議になると日本の発言は完全に無視された。そして六年後の一九二四年には、ついに日本人のアメリカ移住は全面的に禁止されてしまった。こういうことは、これまで日本人移民がヤタラに働き、いつまでも地元のアメリカ市民に同化しないために、差別され排斥されたのだ、とそんなふうに聞かされて、僕も大体その通りにうけとっていた。しかし、これはどうやら事実の反面に過ぎないようだ。実際は日本人移民が排斥されたのは、彼等が働き過ぎるとかいうことよりも、やはり有色人種だからではないか。

日本人が排斥されたのは、アメリカ西部の移民だけではない。第一次大戦のはじまる少し前に、パリに留学した藤田嗣治は、当時の模様を回想して、こんなことを述べている。

……巴里の往来を歩く異様な僕に、十人余りの子供が石を投げて東洋人と嘲弄した。石を浴びて地下鉄道に避難した僕は、他日の復讐を盟った。市場の方面では何十人という大人に取り巻かれ、往来止めの理由で、角袖（巡査、刑事）のために大店の中に引き摺られて、裏口から放免された。又、表の往来へ戻って、入口に僕を待っている好奇心の群衆を、後方か

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

ら笑ったものだ。学生町で二人のアパッシ（無頼漢）が僕に吸殻を投げ付けて冷笑したのを、一瞬の暇に横棄身で二人を束にして、敷石に叩き付けて、警察で柔道の奥義を説いて巡査に二三の手を教授した。こんな事も、洋服が買えぬので手製の洋服が余りに大胆であった事と、若い元気が漲（みなぎ）っていたからであった（『巴里の追憶』）。

藤田がパリにやって来るときの意気ごみは、まさに武者修行の侍のようだ。柔道の他にボクシングも習い、また日本刀を三本、つねに座右に置いていたという。オカッパ頭の藤田の肖像からは想像し難いことだが、パリのような国際都市でさえ、異人種にはそれだけ周囲からの圧迫感が強かったということだろう。しかし藤田は、また別のところで、こんな意味のことを言っている――。「外国へ行けば、日本人は必ず不愉快な目にあはされる。それで外国へ勉強に行つた者は皆、国粋主義になつて日本へ帰るが、若い人たちはさういふ者の言ふことをきいてはいけない。わたしも、いつたんは国粋主義になつたが、勉強をつづけてゐるうちに、それを越えて外国のことを理解出来るやうになつた。さうすると、また向うでもこちらを理解するやうになる。これから外国へ行かうとする人は、すべからくわたしを見習ふべきである」

ナッシュヴィルには、日本人は一人もいないはずであったが、大学に顔を出すと、その日に大学院生のM君に紹介され、またM君から神学部のJ君や、隣の大学の図書館学部にきているN君

などに引き合された。さらに一、二箇月たって、医学部の研究員S氏とも知り合い、これらの日本人たちと僕は仲良くなった。

ナッシュヴィルは人口二十万、テネシー州の首都といっても、日本では地名もめったに知られていない。しかし、そのナッシュヴィルに大学と名のつくものが大小合せて十幾つかあり、日本人も全員で二十人くらいはいるだろうという。そういえば一九一三年、藤田嗣治が初めて留学したときのパリには、すでに日本人の画学生が二十人前後いた由だ。その中に藤田をはじめ、梅原龍三郎、安井曾太郎、その他、錚々たる大家のタマゴが混っていたわけだが、いまナッシュヴィルにいる日本人のなかからも、将来このような大家に匹敵する人物が何人か出てくるだろうか――？　藤田の回想記によれば、留学生で失敗するのは、博奕か、競馬か、女に引っ掛かるためで、とくに女で失敗する例は多く、「巴里で女に迷はずに居られたら、既に成功者であらう」と言っている。

そうだとすれば、ナッシュヴィルにいる日本人は全員、成功者であること疑いない。何しろナッシュヴィルには、博奕場も競馬場も女郎屋のようなものもないうえに、もし日本人が白人の女性を自分の車に乗せて走っていれば、それだけで石をぶっつけられるというくらいだからだ。これはヨーロッパとアメリカ、或いはパリとナッシュヴィルの違いというだけではない、時代の差違ということもあるだろう。

実際、この禁欲的な町で、日本人が一人の例外もなく一生懸命に生きていることは間違いない。ただ、彼等のこころざしているものは、藤田や梅原龍三郎の頃のパリの画学生とはまったく違うし、戦前にアメリカ東部の名門大学に籍を置いた留学生とも違う。端的にいえば、いまナッシュヴィルにいるのは、大半、留学生というより移民であり、移民が滞在ヴィザをとるために学校に在籍しているように見えた。いや、もっと留学生らしい留学生にしても、フルブライト、その他、何らかの奨学金を受けており、親許からの送金で学費や生活費をまかなっている者は、一人もいない。その意味で、彼等も日本の家族制度の桎梏からはなれ、一時的にアメリカ移民になっていると言えないこともなかった。

ところで、滞米五年とか七年とかの、移民的留学生の古つわものを見ていると僕は、彼等の一人一人に〝戦後〟の影が色濃くつきまとっているのを感じ、自分もまた敗戦国民の一人であることを、あらためて認めざるを得なかった。――「もはや戦後ではない」そんなことを最初に言いはじめたのは、海外から帰った知識人たちであった。そして僕ら自身、何年か前から、もう〝戦後〟は終ったと思いはじめていた。たしかに、僕らは経済的には戦後の窮乏状態から脱け出していたし、〝戦後民主主義〟もまた戦後の枠組みをはずして考え直さなければならないところに来ていた。しかし、人間はそう簡単に、変るわけにはいかない。〝戦後〟は僕ら一人一人の性格のなかに深く食いこんでおり、しかも僕らは不断、そのことにはまったく気がつかない……。

たとえば滞米七年のM君は、昭和二十九年に大阪の高校を卒業すると、すぐにアメリカの小さな大学の奨学資金をうけて渡米してきたのだが、彼の顔つきや、着ているものや、そして考え方のなかには、おかしなくらいハッキリと昭和二十九年の日本が映っている。また滞米五年のJ君は、昭和三十一年に日本を出てきたというが、やはりその頃の時代相が内心にコビリついていることが、ちょっとした話のはしばしにも感じられた。J君は、M君のことを〝敗戦の子〟と呼び、その言葉に大阪弁のナマリが抜けないように、着ている青鼠色のスエターや臙脂色のコールテンの上衣にも、進駐軍の古衣めいた臭いを漂わせている、と笑うのだが、そういうJ君からも、やはり石原慎太郎に似た髪型をはじめ、〝太陽族〟はなやかなりし昭和三十一年の雰囲気が、古いアルバムをめくったようにマザマザと浮かび上ってくる。そうである以上、僕自身にも或る〝戦後〟の世相がそのまま肉体化したように残っているのが、傍目には良くわかるに違いない。

しかし、〝戦後〟が簡単に終るものではないことを、何よりも明瞭に教えてくれたのは、このナッシュヴィルという土地や、そこに親代々暮らしてきた人たちであるかもしれない。アメリカ南部にのこっている南北戦争の影といったものについては、マーガレット・ミッチェルの小説『風と共に去りぬ』をはじめ、数え切れないほど多くのものが、わがくにには紹介されていることだから、いまさら知ったか振りを言う必要はないだろう。ただ、一つだけいえば、社会の仕組

をかえるような戦争や占領の歴史は、時代がうつったからといって消えるものではないということだ。

勿論、アメリカ南部には、北部に対する敗戦の怨念のようなものも充分にのこっている。たとえばヴァンダービルト大学というのは、南北戦争直後、南部の荒廃を救うために北部の資本家ヴァンダービルトの資金で設立されたものである。にもかかわらず、なぜか南軍の戦死者の遺族やその子孫に限って、月謝は半額免除とされており、大切に扱われているのだ。一事が万事で、大学の校風も南部の上流階級の気風を基盤に置いたところがあり、その意味ではいちじるしく保守的である。

ところが、そのヴァンダービルト大学からの紹介で、僕のアパートに一週間に三回、英会話を教えにきてくれることになったP夫人は、北軍の子孫に当る人であった。紺サージの、救世軍かバス・ガールの制服に似たワンピースをまとい、髪をひっつめに結ったP夫人のようなアメリカ人に出会ったのは、何十年ぶりのことだろう？　昔、僕が子供で朝鮮の京城にいた頃、こんな恰好をした西洋人が黒いコーモリ傘を手に歩いていたのを覚えているが、それ以来とんと見掛けたことがない。とくに戦後、日本にやってきたアメリカ人は皆、色あざやかな服をきて、かなりの年の人でもサン・グラスに口紅の濃い化粧をし、カン高い声でしゃべり散らしながら、焼跡のバラック建ての家並みの街を我がもの顔に通って行く、そんなケバケバしい存在がアメリカ婦人だ

という印象が、いつの間にか僕の固定観念になっていた。しかるに、いま僕の眼の前にあらわれたP夫人は、そういう種類のアメリカ人とはまるで無縁の人なのだ。

アメリカは移民の国で、したがってアメリカ人は国内でもしょっ中、簡単に移動して行くという。しかし、この定義は南部のアメリカ人については、あまり当てはまらないだろう。ナッシュヴィルは、南部といっても本当のディープ・サウスではないわけだが、それでも住民の大半は何代も前からこの土地に住みついた人たちで、他の州からここへ移転してくるという例は、極めて稀である。P夫人の家も曾祖父の代には、もうナッシュヴィルにきていた。但し、その人は奴隷制度に反対で、南北戦争のときには北軍についた。しかし、そう聞いただけでは、P家の人たちがこの土地でいかに例外的な存在であるかということは、ヨソ者の僕らにはわからない。

P夫人は、決していわゆるリベラルな人ではない。むしろ頑固な保守派である。それが黒人差別に断固として反対し、大学にかよっている息子や娘が校則を破って黒人運動に参加するのを積極的に奨励してきたのは、もっぱら曾祖父以来の家憲に従い、一家揃ってリンカーンの共和党を熱心に支援してきたからなのである。そして、こういう人たちにとって、ナッシュヴィルは決して住み良い土地ではなかった。P夫人の一家は、父親の代に宣教師として東南アジアに移住し、P夫人も教育はアメリカの大学で受けたが、卒業すると中国に渡り、そこで宣教師のアメリカ南部人と結婚した。シナ事変から太平洋戦争にかけて、P夫人は乳呑み子を抱え、夫とともに中国

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook